

探訪 北の風景 58

タンチョウの里 釧路管内鶴居村

青木和弘

とのゆかりが深い。かつて北海道のタンチョウは関東地方や岡山まで渡って越冬し、「つるのおんがえし」などの民話にもなっている。その姿は美と長寿を象徴し、多くの工芸品に描かれ、古典文芸にも数多く登場する。

タンチョウは、日本で繁殖する唯一の野生の鶴で、全長1・4メートル、翼開長2・4メートルに達する日本最大級の鳥類でもある。

環境省によると世界の総個体数は2750羽とされ（J.Harris in lit.2007, in lit.2009）、種の半数以上が北海道東部を中心に生息する。ユーラシア大陸のタンチョウは、夏に中国北東部で繁殖し、冬になると朝鮮半島や長江下流に南下して越冬している。なぜ日本のタンチョウは絶滅に瀕したのか。

実はツルを食べる習慣が古くからあり、江戸時代には庶民がタンチョウを捕ることが禁じられたが、蝦夷地では、さかんに捕獲され塩漬けにして他藩へ輸出されていたという。明治になって銃猟の解禁で乱獲され、大正時代には絶滅したと考えられたという。

釧路湿原の奥地で数十羽の野生のタンチョウが偶然確認されたのは1924年（大正13年）のことで、そこから保護が始まった。52年（昭和27年）に阿寒町と鶴居村で給餌に成功。84年から環境庁などの給餌が開始され、少しずつ生息数が回復した。62年に178羽、88年に424羽、2005



タンチョウが夜を過ごすねぐらは、豊富な湧き水などがあり水の凍らない浅く流れの穏やかな河川が最適だという。生い茂った樹木を伐採して生息地を増やす取り組みも進められている＝タンチョウのねぐらとして知られる音羽橋から見る雪裡川（鶴居村）

年（平成17年）、ついに1000羽を超え危険な状態を脱した。

現在タンチョウは約1800羽、約400つがいが営巢し、最近では瀟沸湖（網走市・小清水町）やサロベツ湿原（豊富町・幌延町）などでも繁殖つがいが見られるようになったが、冬は棲息個体の9割が釧路地域に集中し、約6割が環境省の三大給餌場の「鶴居・伊藤サンクチュアリ」（鶴居村）、「鶴見台」（鶴居村）、「阿寒国際鶴センター」（阿寒町）、「タンチョウ観察センター」（釧路市阿寒町）で給餌を受けている。

こうした状況は、ほかの野鳥が持ち込む鳥インフルエンザなどの感染症による絶滅の危険を増加させている。

そこで環境省は、群れの分散化のため、給餌量



鶴居村では冬になると3000羽におよぶタンチョウの群れを見ることが出来る。鶴居・伊藤サンクチュアリ（釧路管内鶴居村中雪裡南）では、餌の少ない11月から3月まで、環境省による給餌がおこなわれている。本年度は、9時と14時の2回、デントコーン（家畜用飼料のトウモロコシ）を撒き、釧路湿原をねぐらにするタンチョウが集まって来る。2月になると羽根を広げてびよんびよんと舞う求愛のダンスを見ることが出来る。

タンチョウの優雅な姿はアイヌの人々から「サロルンカムイ（湿原の神）」と呼ばれて慕われてきた。学名は *Grus japonensis* というように、日本



本年、鶴居・伊藤サンクチュアリでは1日2回、9時と14時に給餌がおこなわれていて、周辺から300羽以上のタンチョウが飛来する。給餌の30分ぐらい前からが見ごろだ。2月になると求愛のダンスが見られるようになる



タンチョウ1羽当たりの給餌はデントコーン1日300グラム、約1000粒。群れの分散化のため、鶴居・伊藤サンクチュアリでは昨年度より1割削減しているという

を減らし、冬季の自然採食地の整備に取り組んでいる。

その条件は三つ。①冬期でも凍らない水辺であること②餌となる水生昆虫などが暮らせる水辺であること③タンチョウが危険を感じた時にすぐに逃げられるように、周囲の木々が密でない水辺であること—だという。

2008年から20年かけ、樹木が茂ってしまつた繁殖環境の復元などに取り組み、当面は、道南まで繁殖地を増やし、その後は本州までという計画だ。タンチョウの棲息環境の整備は、釧路湿原だけでなく、全道、全国の自然環境整備につながるものでもある。

厳冬のタンチョウ観察には、スキューアなどの防寒着で臨むのが賢明だ。